

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 倉部 華奈
学位 博士(歯学)
学位記番号 新大院博(歯)第356号
学位授与の日付 平成28年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 顎矯正手術が顎変形症患者の QOL に及ぼす影響
第1編 Impact of orthognathic surgery on oral health-related quality of life in the patients with jaw deformities
(顎矯正手術が顎変形症患者の口腔関連 QOL に及ぼす影響)
第2編 外科的矯正治療による顎変形症患者の心理・社会的変化の過程：グラウンデッド・セオリー・アプローチによる解析
論文審査委員 主査 教授 齋藤 功
副査 教授 小林 正治
副査 教授 高木 律男

博士論文の要旨

【緒言】

顎変形症は顎顔面の形態異常や咬合異常をきたし美的不調和を示す疾患で、患者の心理面に影響を及ぼすとされている。外科的矯正治療は、顎変形症患者の心理面に陽性の影響を与えるといわれているが、全ての患者が治療結果に満足しているわけではない。近年では医療評価研究の1つとして、QOL (Quality of life) が重要なアウトカムとされているが、本邦では顎変形症患者の QOL 調査の報告は少ない。また、これまでの顎変形症患者の心理面に関する報告では、調査結果を量的に分析したものがほとんどであるため患者の心理を断片的に捉えるにとどまり、複雑な患者の心理や考えを検討することが困難であったと思われる。そこで本研究では、顎矯正手術が顎変形症患者の口腔関連 QOL に及ぼす影響を OHIP-J54 (Japanese version Oral Health Impact Profile) を用いた量的手法により明らかにするとともに外科的矯正治療による顎変形症患者の心理・社会的変化の過程を質的手法により解析することを目的とした。

【研究 I】 顎矯正手術が口腔関連 QOL に及ぼす影響

1) 対象

対象は2013年12月から2015年6月に顎矯正手術を受けた顎変形症患者65名(男性21名、女性44名、平均年齢：23.6±8.1歳)とし、本学歯学部で歯科的知識を持たない低学年の女性14名(平均年齢：19±0.5歳)を対照群とした。

2) 方法

口腔関連 QOL の評価は、OHIP-J54 を用いて顎矯正手術前と術後6か月時に行った。術前と術後ならびに対照群と比較検討し、口腔関連 QOL と年齢、性別、主訴、骨格性分類、術式、術後症状有無(知覚異常、顎関節症状、開口障害)の各因子との関連についても検討した。統計解析には Wilcoxon の符号付順位和検定、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定、ペアワイズ比較を用いた。

3) 結果

術前と対照群との比較、術前と術後の比較では OHIP-J54 の総合点と全ての領域において術前の患者の方が有意に高い値を示し、口腔関連 QOL が低い傾向を示した。術後と対照群との比較では、機能の制限、精神的不快感以外の領域において、術後の患者群の方が有意に高い値を示した。また、年齢、骨格性分類、術式、術後の顎関節症状や開口障害の有無と口腔関連 QOL との間に有意な関係が認められた。

【研究 II】 質的手法を用いた顎変形症患者の心理・社会的変化の過程の解析

1) 対象

対象は、顎矯正手術施行後 1 年 6 か月以上経過し、臨床的に術後経過が良好な女性患者 6 名とした。

2) 方法

患者自身の病態認識や外科的矯正治療を決意し治療が終了するまでの心理・社会的変化について半構造化面接による聞き取り調査を行った。面接内容は患者の同意を得て録音し、録音データから逐語録を作成し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) に準じて解析を行った。

3) 結果

『成長過程での悩みの変化』『治療を決断するまでの葛藤』『治療開始から術後までの思い』『退院後の思い』の 4 つのコアカテゴリーが生成された。患者の悩みは思春期に始まり、友人は患者が悩みを持つ過程および悩みの深さに影響を及ぼしていた。《外科的矯正治療の情報》は《将来への期待》を持つきっかけとなり患者の悩みを軽減し、治療中および治療後の心理・社会的変化の過程には友人、家族、同病者が影響を及ぼしていた。治療終了後には様々な苦難を乗り越えた達成感や、喜び、自信が芽生え、社会生活における積極性が向上していた。

【考察】

OHIP-J54 は、OHIP の日本語版で 54 項目の質問からなり、5 段階のリッカート尺度で点数化して 8 つの領域で評価する信頼度が高い口腔関連 QOL の評価法である。これまでの研究では、顎変形症患者の口腔関連 QOL は正常咬合者と比較し低いが、顎矯正手術を施行後に改善することが報告されており、本研究もそれを支持する結果であった。しかし、術後 6 か月時の口腔関連 QOL は正常咬合者と比較すると依然低い傾向にあった。口腔関連 QOL の評価法は種々あるが、OHIP-J54 は顎変形症患者が抱える問題を明らかにするとともに、顎矯正手術が患者の生活の質に及ぼす影響を評価する上で有用と思われた。

GTA はデータに密着した理論を生成することを目的とし、プロセスを重視する質的分析法で、人々生活や経験、感情などについての研究に適しているが、顎変形症患者を対象とした報告はこれまでにない。本研究より、顎変形症患者が自身の顔貌や咬合の異常を自覚してから治療が終了するまでの一連の心理・社会的変化のプロセスについて詳細かつ具体的に明らかにすることができた。しかしながら、対象者を術後 1 年半以上経過した患者に限定し、回顧的にデータを収集したというところに本研究の限界があると考え、今後は初診時から治療が終了するまでの各時点において調査を行うことで、本研究では語られなかった新たな一面が得られる可能性があると考え、る。

【結語】

本研究では、量的手法と質的手法を組み合わせることで、一つの手法では明らかになり得なかった顎変形症患者の口腔関連 QOL と一連の心理・社会的変化のプロセスについて詳細に検討することができた。

審査結果の要旨

近年、臨床現場では患者立脚型アウトカムである quality of life (QOL) を用いた評価が医療評価研究として非常に重要であるという認識が定着してきた。しかし、顎変形症に対する QOL 調査の報告は本邦では非常に少ない。顎変形症患者に対する外科的矯正治療は高度に選択的な治療であり、治療を行う上で患者の意志が重要となる。本治療が患者の QOL にどのような影響を与えるかを明らかにすることは、患者が治療を選択する際の重要な資料になり得る。本研究では、まず顎矯正手術が顎変形症患者の口腔関連 QOL に及ぼす影響について口腔関連 QOL 調査票

(OHIP-J54) を用いて調査し、さらにグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的調査を行うことで患者の心理・社会的側面の変化の過程を検討している。

第一報の OHIP-J54 を用いた口腔関連 QOL の研究では、顎変形症患者を対象に顎矯正手術術前と術後 6 か月時の 2 回調査を行い、治療の影響を評価するとともに、顎変形症のない対照群のデータと比較している。その結果、術後の顔貌や咬合の改善に伴い口腔関連 QOL の改善も認められたが、対照群との比較ではまだ低い QOL を示しており、術後 6 か月時の時点では術後矯正治療が口腔関連 QOL に影響を及ぼしたと考察している。また、Skeletal ClassⅢにおける QOL スコアが、術前後ともに Class I、Class II と比べるといずれも有意に小さく、Skeletal ClassⅢの患者は Class I、Class II の患者と比較し、社会的な状況に対する心理的ストレスが少ないのではないかと考察している。

第二報のグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究では、①顎変形症患者は何らかのコンプレックスを解消する目的で手術を選択し、②治療を決断する過程および治療中では常に手術によって変わるという将来への期待を持ち続け、それが治療による様々な苦難を乗り越える一因になっており、③治療終了後には様々な苦難を乗り越えた達成感や、喜び、自信が芽生え、社会生活における積極性が向上する、という一連の心理・社会的変化のプロセスを導き出している。また、本法は人間同士の社会的相互作用や人間行動の説明と予測に有用であり、分析結果の信頼性や応用性を確保できるが、分析に時間がかかるという問題点を指摘している。

第一報の量的研究による QOL の評価は、結果が統計的に分析されるため普遍的で客観性・信頼性が高いが、患者の心理を断片的に捉えるにとどまり、複雑な患者の心理や考えを明らかにすることは困難であると考え、第二報の質的研究を行っている。質的研究では、これまで明らかになり得なかった各治療段階における患者の心理・社会的側面の変化の過程を明らかにできたとしており、量的手法と質的手法を組み合わせることで、一つの手法では明らかになり得なかった顎変形症患者の口腔関連 QOL と一連の心理・社会的変化のプロセスについて詳細に検討することができたと考察している。

以上より、本研究で示された内容は、顎変形症患者の QOL や心理・社会的側面の変化の過程を明確に示しており、顎変形症患者が治療選択をする際の一つの指標になると考える。また、医療者にとっても、顎変形症患者の心理に寄り添った医療を提供する上で有用と考えられ、本研究を学位論文として価値のあるものと認めた。

